Monitoring Post
モニタリングポスト

第１回日本放射線医療技術学術大会「ゆいまーる 診療放射線技術の共創」印象記

田中　利恵
Tanaka Rie

日本診療放射線技師会（JART）と日本放射線技術学会（JSRT）の初めての合同学術大会となる第１回日本放射線医療技術学術大会（JCRTM）が，2024 年 10 月 30 日～11 月 3 日の 4 日間，沖縄コンベンションセンターで開催された。実行委員の視点で，開催経緯並び会期中の様子を報告する。

JART は診療放射線技師の職能団体である。一方，JSRT は会員の大多数が診療放射線技師で構成される学術団体である。両団体に重複して所属している会員も多いことから，学術大会を一緒に開催して欲しいという要望が以前から寄せられていた。そこで，両団体での検討やトップ会談を経て，2021 年に JCRTM2024 の開催が正式決定された。開催地は，両団体が全国大会を開催したことのない沖縄県が選出された。大会テーマの「ゆいまーる」は，沖縄の方言で「助け合い，協調」を意味する。大会ロゴも，青（＝JART）と緑（＝JSRT）の二輪で両団体の協働を表現するデザインが採用された（**写真 1**）。

大会の 1 週間前に，台風 21 号が発生する事態となった。関係者がその動向を注視する中，奇跡的に進路を西に大きく外し事なきを得た。学会初日から会場⇔県庁前の区間で無料シャトルバスが運行され，多くの参加者が足として利用した。また，オフィシャルな装いとして「かりゆしウェア」の着用が推奨されていたため，「かりゆしウェア」を着た参加者で，初日から会場は華やかなムードに包まれた。会場内の「かりゆしウェア」販売コーナーも，かなり売上げを伸ばしたようだった。更に，ご当地グルメのキッチンカーが会場入り口に横付けされ人気を集めていた（**写真 2**）。展示棟の中央では，46 の企業・団体ブースが設けられ，多くの参加者が足をとめていた。展示ブースで集めたスタンプ 5 個とサーターアンダギーを交換するイベントが功を奏したようだった（**写真 3**）。また，この大会に向けて新規に開発された「琉球びんがた鉛エプロン」を参加者が試着して楽しむ場面もみられた（**写真 4**）。

写真 1　左から JART の上田大会長と JSRT の白石大会長（会場入口の看板前にて）

写真 2　沖縄ぜんざいやタコライス等のご当地グルメを売るキッチンカー

写真 3　スタンプラリー景品交換所の様子

写真 4　琉球びんかた鉛エプロンを試着した参加者

今回の合同学術大会は，JART 主催の大会で得られる「日常診療に役立つ情報」と，JSRT 主催の大会で得られる「最先端の学術研究の成果」を同一会場・同一期間で収集できる「1 粒で 2 度美味しい」もしくは「一石二鳥」の大会であった。その実現に向け，両団体で異なる点を洗い出し，それらを話し合って新しい形として共創していく作業が行われた。そして，4 日間の会期で，800 題近い一般演題，特別講演× 2，教育講演× 3，学術企画× 22，教育セミナー× 11，情報提供講座× 9，JIRA ワークショップや JIRA 発表会，機器展示，沖縄県企画「沖縄美ら海水族館の健康管理～画像診断を中心に～」，市民公開講座「おきなわ津梁ネットワークについて」，第 1 回大会開催記念企画として「All Japan Radiology の実現に向けて」等が開催された。展示棟の観客席での巨大モニタによるポスター発表も好評だった

写真 5　観客席のポスター発表会場の様子

写真 6　情報交換会で琉装によるおもてなし（左から沖縄県の実行委員 2 名，白石大会長，筆者）

（**写真 5**）。学会 3 日目の夜に開催された情報交換会では，沖縄料理や沖縄文化を堪能しながら，参加者同士が交流を深めていた（**写真 6**）。閉会式では，現地開催の最終日までに 2500 名を超える参加登録があったと報告された。12 月 9 日までオンデマンド配信が行われ，ちょうどこの原稿を書きながら見逃した演題を聴講する日々を過ごしている。

JCRTM2024 は，両団体が放射線診療の中で持つ役割を再認識し，お互い効率よく協働できる環境の構築を目指す過程で実現された。今回，実行委員の 1 人として，また，両団体に所属する会員として，この歴史的瞬間に立ち会えたことを嬉しく思う。

最後に，JCRTM2024 の実現にご尽力いただいた JART の上田大会長と富田実行委員長，JSRT の白石大会長と奥田実行委員長，そして，実行委員の仲間たち，関連団体の皆様に，この場を借りて感謝の意を表したい。この経験を「ゆいまーる　診療放射線技術の共創」に生かしていきたいと思う。

（金沢大学医薬保健研究域）